国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
番號 和 8787
冊數 24 (4)
函號 204 5

内閣文庫
和書
類
號
冊
架
函

平家物語評判秘傳抄巻第二之下目録

烽火
新大納言乃流されし
阿古屋乃松
新大納言死去
德大寺巖嶋詣
山門滅法
善光寺突上
康頼祝
辛坂落流
蘇武

国立公文書館
National Archives of Japan

平家物語評判秘傳抄巻第三之下

烽火

傳曰。小松殿。小平兵衛宗清とゝく作られり。
八謀叛人じし既にうゝ上ハ世ふおりく
子細のうゝ。ぬゝじも彼ふ与する者ゝ対ハ
ゝ者じし家ゝ人ハ服ゝにえゝくゝゝゝゝ疑
とゝうゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。重盛
父つハのと係よりしるりのゝハ左右ハ
りのし待ゝりゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
時著到と付ゝゝゝゝ諸侍どゝに対面ゝゝ
くゝゝゝゝゝ。ゝじ彼ゝゝゝゝゝゝゝ心清

命をすてゝ罷出たるものハ皆人の上を怪義行りのしるべ命をすてゝ後よハ院中の人々も乎家とあるゝ心ざしつゝもなべし。

然ハ天下小小威勢わるゝ事ハ父禅門の心もやゝ強きなべし。

然ハ急ぎ高くの給東ゝ遍文とつゝ先て作付れ申に高くの給内をゝ武士どしハ。

ゝ高の心ゝふゝ在りまるけゝ時の高くゝ絲数人どし小ふゝ父禅門の心もやゝ強きゝ言ゝ

詩曰権法とりゝ仁義をたゝゝハ良情の

為ゝ恐ゝ心の計畢聖徳とりゝ付ハ

ゝ高に仰ゝ位付とゝそ又時の

上下の心とゝゝ時ハ色時小意ゝ

権絲ゝ義ゝ一切の眼の付ゝ不ゝ

小松殿吾とありゝ上下するの

ふゝ色ありゝ何とゝゝ

ゝや人の心ゝ時ハ小相家の

ゝ小ゝ色桑ゝ人と集ゝ心をとりて

色心とゝゝ恩とゝ恩とハ

人のあと施のゝふあゝ仁とゝゝ

仁とゝ天とゝの聖人も

ちゝ母ごゝろ。ぞ。ぞ。人々の為ぶ。應じ。ま
ふ。の。時。の。仁を守り。おかりしまを
小松殿。軍兵。をおろさ。を。付く。入道。禁門
ちゝ。ろを。ぶ。ひ。何。ま。く。内府。ハ軍兵。とハ集ける
ぞや。今朝。を。ま。く。つ。ぞ。く。ふ。海。の。乃
討。ま。ち。ぞ。も。や。し。ん。ぞ。ん。と。ま。れ。け。る。を
誠。曰。凡。天下。國。家。を。ま。ま。り。の。ハ。ち。ん。已。と。ま。
て。次。よ。人。を。し。ま。ま。ま。ぞ。く。人。を。ま。ま。ま。ま。れ
ま。の。を。ま。ふ。應。じ。ま。ぞ。く。ち。官。職。と。授。ま。の
政。と。ま。ぞ。ま。し。ま。ま。ま。ぞ。ま。ま。て。ま。て。ま。て。
平。也。人。を。ま。ぞ。ま。る。時。ハ。官。職。人。ま。ま。ぞ。ま。ん

ま。ま。ま。ぞ。ま。る。時。ハ。政。ま。ま。ま。ま。ど。書。曰。帝。王。ハ。德
ハ。人。を。ま。ま。を。大。ま。ま。る。ハ。ま。ま。人。を。知。則。百。僚
位。職。天。王。し。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ぞ。を。と。ま。人。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。や。し。ん。ぞ。ん。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
よ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

蜀の大將劉先生魏國に敗軍し呉國に奔られけるを劉備殿下の亮明とりくに呉の孫權とこのたんとなりしかいりくと名ぶへ亮は申けるハ殿ハ少人より隆ぶる相三しるる而和とこそ云に必魏より降參すべくしとりけるを必行命ぐ云旨を きのこゝろくくこそ亮はとつさしかを りもてゆくく孫權は悦しく魏と敗い くこゝろ故小將ハ軍用とつくるに乃 侍と事とくこそ見えたるよ有ける

三種の秘伝こゝろよ口傳

新大納言の事

六月三日の日新大納言成親卿鹿ヶ谷に行ぐ事に おはせけるを山の座小出まくる物新在 りしを雨塞くに箸とゝりしてゝ支 語曰凡良將國と爭くに機未ゆるれぐ射ハ 敵に交とのたくしそぐ志うに云く紹 外しくゆふし愚なる解とゆくゆ門小ぬ 謀とぐゝる既顯しゆ海ハ海 をゆ小家ゝを威とて下小振を則良將ハ 乃し縱を謀あゝ是敵ハ為ふるとてなる

く必ずく赤おかたと逐ぐるハ縦しかるとさるハ
ゆくりなくも心替りと顯ぐるぞいんぐ
そもそも相ともとるべくてぐすやうひた
すらく申方とうちうちの氣色をもて云うち
色赤策ぬべし。ゆうよ親ぐるく人警戒
あるしかるべくもの哉。公の咎よ出
く食小印く箭とえうとえ給ざるうち
色いんぐ大事と計良將ぐ云ぐしんや。
あよ評ぐるぐ幽親人心中金孫うれぐ
只俗の死と悲別と想給ひて平方と失給
ぐうえぐるぐ昔異魏人支國ぐびよ

國と爭ぐ戦ぐしかるぐ魏國大軍あるぐ
ぐうぐ勝ぐうぐ敗ぐとぐ。友ふ異人孫權人長下。
偽ぐく魏國よ返忠と申つりれば
魏人將色とぐいぐく蘇ぐうぐと惜ぐく使
と樣ぐく申けるハ異國ぐく長居孫權ぐん
ふぐしかしかぐ内門ぐうぐとやぐうぐるう偽
に申まうぐしとぐうぐうぐとお待如よ。何
ぐうぐく遅まうりとけるぐや。中ぐ沙等ぐぐく
ぐうりのにたぐぐうぐ赤ふうぐしぐや既
死罷ふかぐふうんぐぐる時彼使よ乘ぐ
武士ぐうぐくと笑けるハ魏人將ぐさきけるハ。

いかゝ世をたゞ今に来るべき者なれば
宮ゝ呉国にまくもまづ生てある勇士なれば
つゝまし思いしよさハくして世のうゝ臆
病ものとつゝりけるもいかゝ云ふ人の死
ける時ハ憂ハる人ハ心なくして今世却く
笑ふ色を出とうるいるのしとりれむ
呉国へ使を時よ眼をいかゝ魏へ大将を
まくまくけるハ侍へ死期小臆病と云て
ふ色口惜き次第し我も死へ云ふ金
ものしらふハいかゝ世ぞしらぬ
時小ハ死期と云て笑ふ

まるべき者小ハ弧厚とかゝ玉と欲
ふりのるゝ申けるまゝ魏へ将ハりの品々
死期よのゝんでいるるまゝ云ふに笑支
きけるゝやとしげねるれむ使ハけるハ
いま申く参用へるるゝれども侍へ弧とふら
まんるる口惜さに申者し彼ゝ此死にあ
るるまゝくハ笑でさるる也あいんとるれむ
天下小大きるる三人へまゝいりのまゝ為ハ
先色りでへ大事と常へやうる疑多さ
人とまゝ。のるゝとりつゝまわゝ色大る
まゝいりの也又常るまゝ心と生ゝく

勝ちをのさ心と実ちくぶとこうとる色又
業なのさまざまいりのく。かりまいい人の所へ。
まざいい人よしのようりく使よまる。ゑ。九ゐ大
ゐるまざいい者し。故ふ大へまざいるりく。
えよ巳めるまざ。次へまざいりの。出くこざ。
世よ人の死すりのいと又ざいわ
ざくゐる死とゐるとゐる類ゐりざと思へざ
年ざ一笑とゐりく。兵ゐ出ふ舟とゐえ
ゐりゐる。口惜さゐるに在と又ざいかる身
ゐしむ力ゐよざでとりれむ魏の将色よ
心と勢ゐりく。を使とゐ。諫よのゐりを

我ふ頭ゐるたりゐりまざ色りざ力ゐりを
敵と首の咎ふゐくとりくぶふたりゐふ
ゐりゐる。親々ほりの人。ゐりく敵と計
心待ゐく拙よりざ。の心ふりかる
大事と思ゐる。故ふ城ふ城の武将。ゐりゐ
故ふ城世の武将。ゐりゐに心待終ゐりふ。
親々雑俵次郎とゐりく。ふ方怖の人やゐ子人弱
ゐりゐ。舟よゐりなさ。云とざゐりき
ゐりく。ざゐ。ゐ。ゐりかる支
誠曰。ゐ時ふゐりく。ざれゐりとゐ云とゐべ。
く妻ふふ孫ゐりゐりゐりのるゐ。愁

ぬる云ふ事ども妻子ハいやましの嘆とぞ。
世上しいぐさけりとうけ給りんぬるとぞ。
舟よ繁給りんぬる目安うもうてけるやうハ時ハ
うへの勇士不勇士ハ是ハ
ふりのうれ高く思ひ
ハ変わるべ経法をとゝめと云つるさはぐさるべし
給小舟よのゝぬさきに
心待ぐすと出給ふ舟よのゝ
るをとるも。然よこの時よ思ひ
ハ勢ぐとけ人。天性聴者
給ひく。悪よしぐ。本心と
時ぐ云ぐさるとも云ぐふ

ハんとすると。敵小武士ゝる者ハ平生ゝ志と可ゝ
実乃勇と習ぐさりのしよ
し。変ゝ付ハ聴者と働しと思ふ
乃人心ゝもぐし。信実乃勇
てゝる常乃志変ぐく。ゝ名
色併武門乃本意と
小小人ゝ。一向名利と
変と思ふ敵ハ外よ偽ぐる心ゝ。敵小血氣
一命ん乃勇のゝ。義ゝ
ぐ。敵小武ゝる者ハ義
ハ勇ハ自然ゝ門よ

赤世の人常に眼といふ物を臂とする。ふつゝかしき物を
ふつゝかしきと。或い又仏神と崇ふ。ふかの。東世の凡俗り
人を。衣類の紋。色みハ為かるの人のうつゝと
うつゝ人。髪髭のそりとやうとりくゝ世界の勇
とぶる人。多分の者ハ。外のこ勇ましく内必
臆病しさゝ。ハ天地の理。知る者ハ内ゝ
陽也。内陽なるのハ。外必陰し故。外事勇
とぶる人。多分内臆病なるのしさあるハ
とくゝ又人の形ようくゝ恐るゝ。謾るゝ
しで色天地の常とのこゝ勇の内の意を

ちゝんがゝ。仁義礼。智ふくゝかゝるの。
ものの事業ふたゝび。勇ゝ。なりの
ものし。ゝ小。親の。内時しのゝ。ゝ勇
氣色ゝ。ゝ。ゝ人ゝ。ゝ天下の
大事と遂ふ。ゝや赤世の人ゝ色とゝ見ゝ座

阿古屋松

入道相国ハ福原の別業よりゝ。ゝ左衛門
池と使者ゝ。ゝ門刑。ゝ
りゝハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ宣ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
とゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

為ちゝ下ゝすゝ如しもの。縦いづくまでおりまで
わゝ分入ゝゝん限ハ。丸屋敷をもとめられける
詠日。仁義紀ゝと為て。ゝゝ初ゝゝゝゝゝゝ。いゝんゝゝし
じ。一ゝゝ少将入嘆又ハ諸人のゝゝむ而と助
おゝしまゝと心得ゝゝ為ゝ。然ハ仁入嘆ゝ謂へし。
二ゝゝ。少将ゝ聞ゝゝゝゝゝゝゝゝ。家と也ゝゝ
謀叛ゝ人の子ゝゝゝゝ。たのゝゝく云ゝゝく
はゝハゝゝゝゝ。分入理ゝゝゝ。三ゝゝ心入又而
と。ゝゝゝ申ゝゝゝゝ。乃上ハ其。世ゝとすゝん
ゝゝゝ外。別ゝ何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
義と知ゝゝゝゝ為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ心得ゝゝくはゝゝゝとゝゝゝ。後日ゝ策
入便多ゝゝゝゝゝ。世ゝゝゝゝゝゝゝゝ。紙ゝ遣ゝ人
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今日ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
忽ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ便と矣りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
或時。少将。為康とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

有木の別当行方十三日過て申けるを
評曰。為康小弱の人なりのくるしいんとの思ひ給物
の方圖とて〻ざる物し。先この少将五歳三歳
の人なりけるを。既壮年よりの人なれば大きに
圖の方臺とは知給へる。古人ともうんぬ
しくゆけるを。憑うるの幽べし。譬十名
の帝王の深宮の中小さきまゝにくし。詔
圖のし限と知給へる。掌とくらべ給へ。
何とある也。先代よりの書き。又縛圖小さ
ちゝりてよりたくし。故に二千里の外古人の心
とゝくる。数人居ぬべし。

とゝの人の申出。少将小さき心とさゝゝ小部て
面目と失のし。為為康心ゝ待ばゝ少将と
くゝとすゝもに宜べし。故小少将の人を器
小中つさいさんいの末の別末へ絶子十町と
義は誠よりをさるに以ばゝ対面こそおり
まさるゝ云ゝ。ゝ文の便るべゝ苦うゝ
やゝに在いつゝ。父の門禄叛故。一且あと流の
内分くゝ也給いいしゝ天下入道殿の心と
しゝ也器ゝ給ゝ。ゝ父子の配ゝ
小紅をくゝりまゝ。絶ゝ。いつゝさに
思ゝさゝ流ゝゝ。ゝとゝ。ゝくゝとゝさうゝ任

其後洛の御使に参ける忠康かくとは
上ハ不肖にはしけれども刀のついでにあなかしこ
色なるまじ。時々お人申に上は急度もしまいるは
志末の別当への御音信とし思ひしまでのしけ
給ひしく然つきよりしと申時ハ。詞よりは礼儀を
用ひよ御様の心得ありしかるを人一々はしまいて上なる
人々はしましたり身の親を戮し給ひ付ぬれば
害しきまる所におゝせ給ひ仁心なりのいんで敵
かれにくらべむしさに色と言かけんや然ば
忠康が智の足らざる所なりしとや。次には
平氏の成敗程よりこしらへ謀ありしかりし謀叛人

と程ちらく流し至るは大なる恥じ。若時に至く
謀とよびまうさんよりは。かくとさき時ハ一ち便安
し。故に讐ある者を流しても時ハ昔より所を
定めて流しつかはさりし。東国の人をは
西国方の人をして小国へ流しつかはさるゝ也。
一ちゝ上左右の者をもつてみ。一ち国一ち所の
地頭目代によくし。故に彼流人と一ちゝ京
の地頭と。ま根なくべきりの國郡へ参りて其
ハ。禍なきりのし。次に配所の所へ参りてのく同
下に流されべきりの。多き時ハ人の与を招く。
なる人の悪なきとのし。知るまでゝ者し縦合

て滅亡せし。是又智恵ありのやに一旦ハ小すかりなり
財ハ身の詮方なきまゝに却て又えもいぬ
禍をまねき出すもの也。さればこそ寵ありて
人をも害し滅せられし也。古人ハ揣ゑ智恵と
いへるもしかりけるなるべし。人の讒言とぞいへり。
世にも有さまりのよいりしぞ寵有さまりのと滅し
とぞ後に殺財ハ恐ろし報ひ一家その身に至る物
也。又ちとさ嶋に流し至りぬるまじくて皆有り
心とゆかるもしれんよしぞ。故に小藤とたてし。
王も滅ぶ人の心細くと勘くなりの心ねよ未さくし
るまのとてきつくんぜ速に殺せら巴し。古しかも滅

とさうな者ハ小心を緣しく却く害せらしき
ものなれとも。其事ハ申に及ばず。日本にもおゝく
ぞ其數多し。故ハ後世の人全心をとらし
めむ人と其滅しめぬ

新大納言死去

き程小大納言の小方ハ都の北山雲林院の邉
小忍くおハしけるが宿不になり女房侍多かり
けれども一人もさらハずりその者ありけの事
諺曰、ハ富ありしく評せらるしく是皆如親の不
德なりなとし常に安きよ居て危と見かれ。
自の憍を長し。下の苦をいとハぬる人ハ終に

天の主ゝ時ゝ人の心ゝ相憑と会る深しなゝ
者ゝ人分の私と云ゝ自分の情よ賜
禄と費ゝ下と憐恵付人を学ゝ
の恩と報ゝ叶ざるものなゝ良将人
と用ゝ官禄と養
ゝ者ゝ恩と育時ハ天色と
なに人し示ゝ者ゝ不義ゝ
の中ゝ人ハ縁ゝ身と
ゝなゝ人り義と云ゝ恩の

小ハ家命とゝ報ゝ色昂良将官禄を
人の命とゝ云ゝ小わゝ
ゝ人と待
ゝ求岳ゝと傳受
ゝ人三
時ハ争国ゝ
敵ゝ
ゝ人ゝ
ゝ謹ゝ
ゝ人ゝ
ゝ道と
ゝ

或人問曰三権の大要如何 答曰禄と死と官

と色也。問曰。侍ハ学問ハ何を専細と説給ふ
哉。曰。基深書小つゝかゝ。所ハ未世の
為小ちゝ。ものゝ人と成よ。家よりて
人の性をさとるよ給ふ

第十

官と授ゝ。ち心知の浅深小ちて色と
授ハ位ゝ重ゝ礼法ゝ。官ハ
礼の助也。凡百官悉上よりゝ下と恵
と礼ゝ下位小ゝかゝとゝむと敬
ゝ。礼無則。国主威ゝ。侍威ゝ則。士卒法
小ちゝ。故小備金ゝ我ゝ。じよ利ゝ色と

賞ゝ。心智の忠ゝ。官職と授ゝち忠功と賞
ゝ。氣力の忠ゝ。禄と与ゝち報と示。延位と進る
の權法。官ゝ侍ハ礼。礼則威。威則義
義成則死成。死成則我小利有我小利有則絶り
天下と保。故小ちゝ日。官等權とりて
ゝ

第十一

禄權。禄ハ色敵と亡の毒薬。兵と作る良
策。如何ゝ。凡古今の名我ゝ者の
論。悪利とおゝ故ゝ人の恩
ゝ方ゝ。ゝ。ハ。禄と施ゝ。禄
恩ゝ。則下色小報り死とりゝ。義と

りゝく禄と用ゐ人深窓と称く、用ゐしゝうんで敵と亡し、岳を待りゝ人りのし。故小国主民を
ゝゝゝゝ金主と奏れるゝゝゝゝゝれ金主ハゝゝゝ人
骨肉ゝゝゝゝゝゝ民人骨肉と王宮ゝ集る
時ハ天下飢饉人始。国とゝゝゝゝの元ゝ。
ゝで色金銀と待ゝゝゝゝゝ本源と永ゝ色と天下
人産窮ゝゝゝ考ゝ小王宮小ゝゝんゝゝと窮
ゝゝゝゝゝゝ本源人窮三り。一小云宮ゝの
士。二日。安民政三日自制の法。ゝ三りゝの天
下と待ゝ人法し。天下人用財三り。一云民。二
日巧近者。三日商人色と国人三窮と云。民安

けるハ穀多し巧近安ゝれで用奥ゝし商人
やゝゝれで珍財国ゝ満ゝ三つりのと失ゝ
ゝゝゝゝゝ小糧と奪ひ穀ゝと穀ゝ。
ゝゝゝ苦ゝ色。上小金銀とゝゝすゝ時ハ巧近
職と怠ゝ。上に財とゝりゝゝゝゝゝれハ
商人国ゝりゝ故三窮自ゝ小国とゝりゝゝの
志と待ん国ゝゝりゝ。三窮と待ゝに法ゝ窮
明ゝ人色とりゝく上人人心ゝ密して下万民
人禄と同ゝゝ時ハ天下と保ゝ久しゝゝと保
ゝ金ゝれで金銀珠主ハ元ゝ下ゝゝゝ故天下と
一人ゝゝすゝと禄と修ゝゝ人権ゝゝ此権等

則。汝ら色に敵し何者ぞ色に随ひぐらべん。
故小兵と用ひの權色とりくしたる
曰禄等權とりくもしこと云

第三

死權。汝人の命ハ色諸寶の主也如何とうれば
りくくの寶悉主あり。しかの主ハ色
人の命よりとどや室と也室を得室
とうしうし又色命をこそ命ハ
金銀珠玉奴婢寶財。所領馬一つとして
もとすべき益なし。故小童しくに貴づさは
命しぬとくこそ恩と禄恩と

雪とり時ハ所在生命ハ恩の綱と通ひ
得ぐ義と守り功と立ること命と重恩の下
小失ること少ふこの三ハの物童ばどんじを
るこもと上寵禄と恒じ心也のつるハ但
忠ありて寵と授心也の逆うに付くく功あり
も賞せざるこんハ主幸必忠功小賞ありさと知
く新小ふくく守くこと戦ハ何ハもくもくと急
なり時ハ走北軍法曰也じと不平と貴ばと憎ど
忠功と賞云云。故小賞罰ありと正道と賞罰不
信しく殺罰とりくく兵と制する時ハ外
よハ恐内勇也ありくこと門よ背嘆ありく

なほ小士幸新を救ひ給ひとりつくわ公曰死等
とりつく權もつ云ると
傳曰入道信盛子息八重盛小宣けるハ今家
八謀叛人どもと子定めあるとて企
ると彼小名ふと云ふ
少又大事なるべし一々小首とるべし洛中ハ
さもなくして宮ひけるとて重盛中ハ御
ちのいひつぐと思ひ見ひくうる昨今の
用意もいつくと宣ふ久家金てうべく
いへどいづくにいるべ者うるしいしあるべ
もに上ぐりて弟家よ従ふ武士八中もうる

変小心を通じうのいかるべ彼と一てし
死罷よ行ものべ連てし通ね多八上し存
又くるる禍出来ひるべ小ちべくを流
ちもも上しく罷八性重とべれ死罷ア
とこのりるべとトさ上けるべ書ちて
一往係罷よ上ちもけれし踊ちて遊く
小申付れ死罷よ行けるべく云ると中ものと
新大納言ハ市盛八為しもうる縁者の
るし文門刑屋よしる人の子息丹波少将と
智よるの行ひ名れ盛卒尓よ殺終ちる
けそ故小雑俗ハ命よ申付られひそうに隠

しく殺し給へるを
誹りもの親々を殺すほどの者よりは
いとゞ色々の子の
ぜ〻しく家ぞ
うもうもなり給ふ付は人恐ぢさせ給ふ
又の人を殺しもせず
得ぬ又ハ下の民
付は縦色々の罪よ
うもうもし可しなを
ぜ〻民の世治る付
故小罰非〻しく行

いりを嶋へ流罪をけらる

評曰。凡天下の大將の官小納言に過ぎず。國主の大道と傳
ましに。則關の官をなる人と。丹官とをなる。故小名と諸官の
棟梁とも。大政大臣。右大臣。内大臣。
三公の官とし云。自宗の官より職をく以
じし。内三官とは。所職をなる。さきは神代小
天照大神宮の御子とをけく天児屋根
命と。天忍穂耳命。左右扶翼しく内つぐさ
の後人皇の始神武天皇の御宇の天璽

子命。天富命とをけく又左右の相しを為
つと。上古より。大臣と云号をけ生。今の
大臣とをけく内をなる。人王十三代成務天皇
の内宮より始て大臣号をなるをのつ
の凡人とをけく。内宮より官をなる
つと。然より儒大寺氏。藤時より弟く。宗家
より家臣と称れ。氏をじをく。つぎとも
始て。色小人より。内乃官をなる
官爵禄八卿とも。相国。
と仕人。官爵禄。
内平家威勢小仕。

例のさかうひとのとき時いうんで初德をうば
乃者ハ是とうとやと思ふるけしや德大寺どの
孝子乃德おりしまして人のうむ先第上小その
家乃名よし德大寺と名と付るゆへハ縱德
大さにとてつかさてつかさ俗もものさるとと
嘆きあつ次小ハ主乃德を人のうハ
今此時小あるく王道衰ひし平家世をと長
じ天下若りさむるとうげさ行ぐけれ高
きうの心得のくしく不德第上乃家盛うぐ
小家階と称ゑとうとうとうとうとうとる
是小人小をさ人よわうどやおくうるひ計

世乃人かうるにおうく心勝乃うう
とうとうとのうるとと思いうう却く
主家主乃と減るの多し易自黙而是とな
とと云るの物いうぐれども心を通ぐるの
きるとうとうぐる付ハ人のうるよまれ出ぐる詭
よわうど我小德大寺乃廣りうまへ乃稽
るのうるの弟とうやまの礼者よりうどの
どと新大納言成親乃ハ者よまのされ
俗人うう命しうきうぐうう物いうぐを
どとのうるとのうるに少ハお細うう
きいうんとうれど是新大納言ハ家盛乃

家階と称されしに付謗数とくるるの
小僧大寺辺ハけんく大納言の宿と論し
て籌屋ヲくれ。ちに上出家入乃ことをなんと思
りしけりそでよちに心根大きにさぐくるる。
小新大納言乃謗数ハ乃ちけるハ付徳大
寺辺ハ徳人よ嗚ちしの色ヲ
ちくく平家のわしく徳大寺辺と情を
思ふるなる又ハ故よ。清盛乃好不乃氣情
小ハるる警とおくれけるる。色又自分乃
企ハるわるくて童子来く諫けるて自
然しちに徳とたちけ来小わるさるる故ち

ちに諫終小ちのわて ちに義と謗ハるるハいるよ此
なりしと用ハるくるしし。徳大寺辺ハ
ちの徳くちに乃程の さ付ハるるるとく。
故小来世乃人ハ故とちくくやう
乃謗をのと時ハうるいさ利として行ハ
るるるの思るるの上乃諫さ来
天理乃却ハよわくて故小後世乃人。
ちわよくく心と付徳とちくる
とおさむるハ天もわざわさハるるを怪
ハる人
傳曰茂義人奇文童ハ乃田滿仲家侍乃

無書とおもはれ計謀の源と発せしりのこと故
小或時重家德大寺殿の志を奪ひ奪ひ
の計謀候ぬるが日南家禅門
の気情とあんぜらること。彼心大きにあり。故
小又宵は小雖言怨深く色々うべき此言
のたくあり小自然しく陥るとも省ぜず。
ともすりのとは二ちの陥るとも省ぜず。
主忠と補人也今厳嶋と信敬一致のく
ぞよ人ぞ悉皆名人なるとも思ふ故よ今
下の武士主忠よ随ふ心なし貴ざる厳島と
やまいなりと。彼の社具を造ふ

この人々の心をとるこしらへ。色世よ故よ
者と今らの誓おり。のさば必可のんやと
申けるぞ大納言殿。即この計略おりける
よこうく果くわかとこけ為こ云。色
実小重家が策ぐこ。史記曰。わと姿者
雨し容と色人を鑒者吉凶と知。凡國と争敵と計
変必先を情とあるこけ主ば謀敵小應ぜず
しく大計こる徒こ。却こ。
害とおもと故よ異国こ。良将けんと秘蔵
志の士と求こ色とこ。況
わ弱こ良将こ人皆けんとこ人まる故

謀と用ひる通力ありと在と侍りしかば入唐
色軍旅の大秘術とかくれなく傳ふる
山門滅亡

ようりゃくに法皇ハ三井寺の公顕僧正を御師
範とうけさせ給て真言の秘法を傳受せ給ひ
九月宮はらのそうしゃくに灌頂をうけさせ給
えけるハ山門の大衆いきどをりとりけるハ青
龍と御灌頂の受戒ハ唐の南山にて通達せ給
る先規しかるをとりのぞけ給給
りのゆゑに高野寺と焼拂ひ給ひ申けるを
評曰ハ仏法ハ天竺の王道にして菩薩の

行ひと事しかるに世を治むるとなり天
唐ハ儒道をもつて立常とすれども天下
を治むるにもちゐてハ神仏をもつて海
内ハ小漢土へ始て仏法の渡
るハ応神朝の王仁にはじまりしよりあり仏法
の渡りしハ欽明天皇の御宇にはじまる
百済国より仏像をもつて仏法世に広
まりしハ聖徳太子ひとりの御ふ子天
下の摂政ましまし礼義官職の乱を
しるさせ給て仏法と世の有為の業世濁乱
の衆生を救ふ仏法ハ日本の意

と失ひ、神仏をとわづらはぐる法さへ多しも
上天理おのづからの常とし、やもすれば
色香をとわづらひ、恋を縦仏法とやもすれば
うらみをとこそ、聖徳太子の在ますに
ごくにこそ忠大仁とやもすれば
人と云ふ事下万民の為に仏と行ず
給時ハ、ようやくれとして面々の心ばせ
愚鈍の尼入尼ハ、ごく後世菩提の営し
こそ死して後の事ハ、思ひよりて
礼義の人ハ、ようやくの事思ひよりて
家沙門の行と学ばるる事ハ、天人の御意

といふ事ハ、ひかるもし頂くぐる
人ハ、ようやくに先例ハ、まず在給ふ山門にて執行
せ給ひ、くこそ例ハ、御意ハ、
雲仏法の意根ハ、思ひ出て在給ひ、例
と肖るべきにて行せ給ふ、又仏法
の御意ハ、ようやくに仏法ハ、根警念とすべき
柔和忍辱とこそ、やもすれば仏と祝
玉給へ、故ハ、仏法皇の法華経評
ようにこそ、又山門の大衆山門にて灌頂
行せ給ひ、ぐるると憤げ、又云ふ事
僻ものべし、己が人と、人の祝と限る

是又高山の仏法と思へるわるびれ利慾
と申志なり。山門の評あり詳に聞こに異
山門の堂衆学生仏法を妨る出来る合戦
小及毎度の学徒うちかたうちて山門の滅亡
家の法大事とする堂衆としの学生
の所従の童部うちの法師よりやう
又は中なる法師ぐしてあるけり。彼の一千金剛寿
院の座主を奪ひ法師の時三塔の番とつる長
衆と号しく仏の花うちて進ずる者ども也彼
と手行人とを太刑とするもどるけり
彼の学生の方うち家へ参用申武家へ触前

法師を出しうつる不及相国院宣と称して紀伊国の
住人湯浅権守宗重山下半門の兵と二千余人相
うつる堂衆と攻られけるに官軍利とうつる
又うつるいし堂衆うち学生仏法と申
評日堂衆学生に対つる学生仏法と申
うつる好まの心法と学ぶ風に色と貴うして堂
衆学生とあるたるこの学生小未世小出り学
生しいしく仏法と行ずるの名聞慢と
うつる慢利欲と利とうつる。世俗小
等しく。故小堂衆色と恒して自従ず。彼と
学生方この法と恒ずる。徳のき法師の仏

ぶりを思ふのさま主人に同ふしてまたに等くしく。
堂衆とまたいうんとまたいうて小堂衆憤
宵けりしなほよろこの乱入の原に学生ばかりの参入の
ものとおぼしきものに上洛門ばかりの者と常
しきの人と従ん欲ほるに学生如来の本
意と失ふにおのおの小王道としての心得
ものくして官軍とくぐんれ文法華軍兵とりく
をと責ふ也ばかりに大きうに不覚ぬるに。
ぐんと軍兵といけらるとしたる軍兵しく。
平乱とたづしる時ようとうけんじし。
剥討負くり退るを重ての誤ものとや敵

兵法敵人の気と案じ勝負の乃沢と勘意
しくりつさの座と味方より待次より兵と出
とりのし。故事清日人と沙汰しく人より法ぬで
と云ふ。乃故小法堂良将の兵法と知人の
いうしも法とうぐの平人とうのくりぐと
つくりし舞よりてうし。中して堂衆のうし
とうう気色とのしてくれぬ気とうぐいる。
を長むのをとうくしく。作くの謀
とうぐしいうしてうけ弥を時分と凡
今くを色とひぐ時。我ぐして勝ぬ金
うぐし警背りのうし晋の国より奥部くる

我と好ませんと晋国し賊則ち攻
ぶるしかるに或時晋の大将夷吾ことごとく
城郭十里ばかりに多の倉庫と造るべく
三十日の内に夷吾は兵糧財宝を付るべて入る
ばかりなりけるに夷吾とりかく
ると米城と出くる色とにしかるに晋の
侍ぬるとくるとあるよりお島とうてたちまちと立
切色つよ責けるよりうく絶則れしと則
敵とぶやうの誓ごさりのし
なふ出し謡寄しのちまとし則と則と好と
さうのいうしとしうるし絶と絶うしく張る

と後しのまうしも云うのうの策ある時ハ少の
堂ハも敵ふるぬけれども思ひ思ふく
しかとりつく色と攻ふる愚く云よ
うしとしかる山城と言ふハ第一ふる
のうとでしうしよう喩城よ出ける色
時ハうしと云りのとりつく城門の水筋
と動ふ色ふを堀りく新しと云りのとも
水をと出ける時ハ城門の外水書りのし
又堀けうと色時ハ色けの筋よりうしていて
中うしくも外と躍さぬ又ひを
りくかとうる時ハ樋とうかくもぬ

ちを極と切おとしたまひしかは
ぶ[illegible]付ハ別よりうひ思ひくらべて
をとこ[illegible]をそ[illegible]
へし兵粮攻とつくるに強敵の兵粮のつる
とかゝ待ましかはこそ敵の糧のなを邀
次よ城中に兵粮を入。次よ粮うゝと送て世
つゝに同士と云りのを入。孫とりく城中
の兵粮ゑと燒せうゝ山城と責
ふ七種の秘術をつくしに[illegible]
ねうくしくに城をうに攻[illegible]れ

石先寺案上

評曰天下の政悪必世よ兵乱あ[illegible]
奚仏寺社案上ちりの[illegible]は
一ゝ弟社震動し二ゝ雄雷りき星
三ゝ異形りの化生ちりと世上
とる。ぬ[illegible]水山[illegible]水ちりて立
竹まよやまい出ます六ゝ民家ふ疫病
七ゝ牛馬病死すりる必兵乱世記
りのくりの兵先寺の案上よ兵乱
の[illegible]つしむ[illegible]ゝ[illegible]ハ悪
政ハ善ると害ちりの。毎よ神社仏寺の
善所先滅ちる悪相とちりも毎礼記曰

國家將亡妖孽起しるしを田舎見聞
よおもき信濃國より倡遊せりしに書は
如意輪と奉るを東八幡宮かりれたりて
音乃山路と夢ゝとうるをけるを実よ
仏力の不思議ゝもるの程を知
らんりの奥くもるもの
ぞゆへの有るも仏力も変もるのゝ
仏又悟の工夫十方衆と員力をられ
又威神力とりくおしを云ふ仏
乃人とい有力乃大人とも云ふ
力仏力者大うるを変をきう

康頼祝

寺解ふ鬼界が島より流されり平判官やすもう
用陽乃宮殿しく出家しく法名とバ性
照とうそ付しるとけるを乃所一首乃歌ふ
終しく宵しくねる世中と疾もてぞ
るぞしきしく詠じけるる
評曰康頼邀世ゆきの乃
乃しと寵物過しうるは
まにしく出家しるの
一首乃歌よ終しく宵きてある世中
とくもぞしるう悔きしく情ね

行ふ。ならひ世を恨ずに俗にれば元家出家とおもはるる人はわるる人なるべ何の思出の為ようなる様数しの絶ると宮ほけんや終よ世を宮と云ふ。なるべ心得なるべ。或三界流廻と思く儒とりとりんが為よ。出家道世する者なる。是をまことの道世出家とも或述懐よりよりく世をそむくりのなるべハも執慈慕のなるとも道世なるりのなるべハ報恩の為よ道世なるりのなるべ康頼の道世仏果菩提のあるを思ひ入るよハわるべ然なるるなる

なるとひさかるなるもなるるなる形と思りんしるまで一向の恩ひなるまで世とのがれまるるべるべるべ康頼なるべハと作る流るるなりのなれ

評曰やるるべハを作るべ海よるべ。南参詣帝礼梵天帝釋天天王堅牢地神主祝の鎮守諸大明神別してハ熊野の権現安義大明神吉のるべハるるべハと一ものるれ加べるべてるべ海よるべるれけるる是世をるべ出離の為と守人りるべされバるる苦の小評るるべ実の道世よ

くるまるとそうもうしけるを舟波や時ちかの報
のるとそうもうしけるを世をあつとそうもうせ
しを敵化しくるをさめたりまつべきをいかりくる
をいかりくる心中より恩をもつて怨をなすべし仏心の報
はちかのさがなり経曰十方仏土中唯有一乗法
なれどいうんで出離と祈乃人々のこと願わ
と思ひでやと西方引化の経文曰去此不遠
いかりくる心迷ひハ浄土も穢土心なる時ハ地獄
も即浄土なれど鬼界が島に悔くる時ハ新
うつべし経曰穢土即寂光浄土と説給へ
ども文なる仏記とうたがうべハ仏のる法

皇の内謀うちしもうもう凡天下国家とうさうと
紂時ハ世よ急将ちかく盛うる時ハ仏のる偽の
ちうちうと直りうるく彼急将の威とうる
天下の窮民とたくづくりのく兵法曰権謀
とりく仁義と助ほしとうと毎小兵法の
三妙の謀と相傳しく威凡とて下ふるへ
くうと即ち兵道の深密也安説ける品偽

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan